

臼杵磨崖仏をめぐる学際的研究に寄せて

(パネルディスカッションを終わって)

別府大学教授 後藤宗俊

歴史フォーラム「磨崖仏の世界」第二日のパネルディスカッションは、二部構成で進められた。第一部では美術史・考古学・日本史の専門研究者がはじめて一堂に会して、臼杵磨崖仏の造像とその歴史的背景について論議をすすめた。第二部では主として保存・修復と環境整備等の問題をめぐって、いわば文化財保護行政の領域に踏み込んだ論議を行なった。論議の仔細は前掲のとおりであるが、以下司会を担当したものとして、感想的な所見を添えたい。

一 遺跡としての〈古園石仏前庭部基壇〉をめぐる

歴史フォーラム第二日は、パネルディスカッションに先立って、前掲のとおり飯沼氏(日本史)・仲嶺氏(美術史)・菊田氏(考古学)の三氏による問題提起があった。それぞれきわめて興味深い提起がなされたのであるが、時間の制約もあったので、司会の独断で討議の柱を菊田氏の考古学からの提起、それも古園石仏をめぐる問題のみに絞らせていた。臼杵磨崖仏群周辺における一連の発掘調査の成果は、臼杵磨崖仏に関する近年の諸研究の中でも、特に最新の

情報であり、かつ多くの実証的、具体的資料をとまなうものであり、学際的論議の柱として好都合と考えたからである。結果として、発掘調査の成果と、そこから提起された数々の問題をめぐって美術史・文献史学の研究者ともども吟味し論議できたことは、臼杵磨崖仏の研究史上特記するに足る意義を持つものと考えたい。

特に菊田氏の提起する臼杵磨崖仏、とりわけ古園石仏における二つの画期、すなわち一二世紀後半まで遡るかと思えられる古園石仏創建の時期の問題、そして鎌倉時代初期に想定される大がかりな修復の可能性という二つの画期の提起については、少なくとも飯沼氏による歴史的背景からの考察とすりあわせることによって、当初考えていた以上の成果を得たように思う。後白河院、平氏政権、源頼朝と義経というような歴史的人物や勢力のからむ、国家的で劇的な歴史の転換点があって、これにかかわって在地の豪族臼杵氏や豊後国守等の動きがあって、臼杵磨崖仏の創建と再興という事業が、こうした歴史の進行に深く連動していた可能性が確かめられたのである。特に鎌倉時代当初の、石仏覆屋の瓦葺きの採用等の大がかりな修復の背景に、頼朝政権の関与を考える視点は、奥州平泉における頼朝による同様の施策を思いおこさせるもので、今後さらに研究を深めるべきところであろう。

このように、臼杵磨崖仏をめぐる考古学と日本古代・中世史学との間の論議は一定の成果を得たように思うが、美術史の分野との学際的論議は十分に深めることができなかった。この点はなお今後に期待しなければならないが、今後論議を深める上で、考古学の一研究者として若干の補足ないし問題の確認をしてきたいと思う。

いうまでもなく問題点の焦点のひとつは、古園石仏造願の時期を、十二世紀中ごろまでしか遡らないのではないかとする発掘調査からの提起と、同石仏についての美術史サイドの大方の年代観との間になお時間的開きがあるということであろう。もちろん美術史の研究者にも、十一世紀後半を下らないという指摘もあれば、ほぼ考古学の提起に近い年代を考える所見もあるが、ともかく大方の意見が十一世紀のエリアで考える美術史の所見と考古学の提起のズレは大きいのである。この点については今後の論議の深まりを期待するのみであるが、ただこの発掘調査がはじめられた昭和五十

年代はじめ以来、古園石仏の修理の過程、その後の調査の経緯等を考えても、古園石仏現地での発掘調査の成果が、臼杵磨崖仏の研究の最前線で、十分に学問の領域を越えて理解され検討されているとはいいがたいように思われてならない。そうした傾向は、今回の古園石仏群における覆屋建設にあたって、それ自体超一級の史跡そのものであるはずの古園石仏前庭部の建築基壇遺構が、何らそれとして表示されることもなく、新しい覆屋の床下に埋めこまれた経緯にも反映しているように思われるのである。

古園石仏にかかる発掘調査成果で注目すべき第一の焦点は、石仏造像過程についての所見である。それを菊田氏の提起および発掘調査報告書等によって要約すればおよそ次のとおりとなろう。(1)古園石仏のある現地はもと急斜面の崖であった。その崖面に石仏を掘ることの出来る凝灰岩の層があって、その上下にはそうではない層がある。そこを何らかの理由で選地している。(2)この崖面は急斜面であって、このままでは造像作業さえおぼつかない。そこでまず崖面の凝灰岩を粗く削りとり、磨崖仏の造頭のための面の調整が行われる。掘り出された岩石は崖の中腹前面に積みあげてテラス状の前庭部を造る。(3)この前庭部で覆屋基壇を整備して堂を懸けて石仏を彫る。あるいはその逆で石仏を掘って堂を懸けたかもしれない。

ここで問題は(2)の工程である。筆者も発掘調査に参加して、この前庭部の基壇下に埋め込まれた岩石は実見した。ここでは、石仏前面から急傾斜する地山の上に、明らかにノミ痕を残す大きな岩石が無造作に、しかも多量に崖の中腹に敷き込まれていた。これらの大きな岩石の隙間には、同じくノミ痕を残す中小の石片が埋め込まれていた。これらが前庭部の基礎をなしていることは明らかであった。この岩石が古園石仏造頭作業をはじめににあたって、あらかじめ崖面を削り取って、いわば彫刻面の面取りを行った削り出された岩石であるらしいことは現地の古園石仏の大きな凹みのある断面からして容易に想像できた。もしこの多量の岩石が他のところから持ちこまれたものとするれば、それがどこから、如何にして搬入され、この中腹に持ち上げられたかという疑問が生じるし、何よりこの崖面で石仏造頭に先立って削り

出されただけの岩石はどこに始末されたかという疑問も生じる。その両者を合理的に理解するうえでも、右の想定が妥当と思われるのである。だとすれば、件の前庭部の造成とそれに続く基壇の造成は、石仏造頭の作業に限りなく近いか、これに先行する前段階の工程であった可能性が高いのである。菊田氏が「ここ（基壇部分）にはじめて入った人の、はじめての仕事が石仏を掘ることだった。（9・8「毎日新聞」）」という指摘もそうした立場でなされたものであろう。

発掘調査の成果によれば件の前庭部基壇は三層からなる。上層は今回大修理による覆屋の下にある現在の層。その下は鎌倉後期ないし室町初期の再建時の層、そしてその下が最初の建設になる層である。この最初の建設については、瓦葺きの建物になったのは十三世紀の初めとされる。しかし本尊大日如来像膝前の下で出土した灯明用の土器などから、最古の遺物は十二世紀中ごろまで遡るものを含んでいる。これらの土器は右の中層基壇のための整地層から出土しているということであるが、この整地層は土器の出土した大日如来膝前の直前部では地山に乗っている。菊田氏はこれらの結果から、最古の整地層の造成は十二世紀中ごろという所見を示した上で、「現段階では十二世紀半ばまでだろうという事です。ただこれから調査の結果によっては、まだ遡る遺物が出る可能性もあるだろう」と発言している。たしかに一連の発掘調査は白杵磨崖仏群周辺全体でみれば、なおその一部を発掘したにすぎない。今後近辺の発掘の進展によって新たな情報が出てくる可能性はきわめて大きいはずである。しかし、それは白杵磨崖仏群全体のことにかかわっていることであって、少なくとも問題の古園石仏の前庭部基壇部分は覆屋建設に先立って、ほぼ完掘されているのである。したがってここでは、これ以上新しい考古学的情報が包蔵されている可能性は皆無に近い。したがってここで出土した灯明皿群は、少なくとも考古学的には〈遺跡としての古園石仏前庭部基壇〉にかかる最古の遺物と断定するほかはない。

一般論としていえば、寺院の基壇や建物の年代とその本尊の仏像の年代は、一致するとは限らないし一致する必要もない。仏像が移動可能な個体である以上当然のことである。しかし古園石仏のような磨崖仏の場合は事情が全く違う。ここでは石仏も大地の一部として固定されており、そのようなものとして前面の基壇と連続している。ここで石仏造頭

に先立って行われた基壇造成と、石仏本体の造顕を時間的に無関係のものとすることは出来ないのである。考古学的に
いえば、石仏本体は遺跡としての前庭部基壇の遺構と不可分のものであり、これと一体のものとして遺跡の一部を構成
している。もし基壇の造成の時期や、ここで出土する最古の供献土器の年代より一世紀以上前から、この石仏が存在し
ていたのであれば、それは奈良時代の遺物を出す寺院跡を飛鳥時代からあったものというに等しいであろう。現
状でいえば、十二世紀半ばごろ古園石仏に灯明皿を供えた人は、その創建の日に限りなく近い時期に、ここに参拝した
人というほかないと思う。

以上蛇足となることを省みず、古園石仏前庭部基壇についての提起に私見を添えたのはほかでもない。こうした考古
学からの情報が、それとして学際的論議の俎上に乗せられ、さらなる論議を経ることによって、臼杵磨崖仏をめぐる研
究に新たな地平が開かれることを願うや切だからである。

なお考古学プロパーの問題として付言すれば、今後の問題は十二世紀半ばといひ、鎌倉初期という土器や瓦の編年的
研究をさらに深めることが必要であろう。特に後者については、宇佐弥勒寺跡で建久三年の再興時の瓦とされた連珠文
軒平瓦等が、年代観の根拠となっているが、この種の瓦は近畿地方では四天王寺や興福寺、さらに平安京の六勝寺関連
寺院跡等で出土している。これらの中に、一部十二世紀代に遡るものが含まれる可能性はないか。またその九州への伝
播の経路等の問題が研究の課題となろう。

今回のパネルディスカッションで、菊竹・渡辺・仲嶺氏と美術史の分野から三人の気鋭の研究者に出席いただいたに
もかかわらず、美術史からの問題の提起について論議をふかめられなかったのは残念であった。これひとえに司会者の
非力と時間の制約によるが、たとえば山王山石仏に臼杵磨崖仏群の淵源を見る仲嶺見解についても、大いに論議をいた
だきたいところであった。また古園石仏の問題や中尾の五輪等について論議等の中でも、美術史の三氏の見解にそれぞ
れ位相差が見られたが、これらについても十分に論議したい問題であった。また今回の論議では臼杵石仏の創建をめぐ

る問題は、古園石仏のそのみに限って論議したが、このことと臼杵磨崖仏全体の中で、その創始をどこに求めるかは、おのずから別の問題である。ここにはそもそも質量とも全国に抜きんでた豊後の磨崖仏が、如何なる歴史的背景の下で、本源的にどのような性格の仏施設として出発し、かつ発展していったかという大きな問題が含まれている。先の仲嶺氏の提起や飯沼氏の提起には、この点についての注目すべき見解が含まれている。ここでは、両氏の問題提起を味読していただいて、この問題についての関心をふかめていただきたいと思う。

二 臼杵磨崖仏の保存修理等のための恒久的施設をめぐって

第二部では主として臼杵磨崖仏の保存修復と環境整備の問題をめぐって論議をすすめた。臼杵磨崖仏の修復事業は、十五年の歳月を費やしてようやく竣工したわけであるが、パネルディスカッションの最後にコメントいただいた西川氏は、今回の修復について「(これは)自然への挑戦であります。自然に挑戦したときは、よほど自然と仲良くしていかないとその揺り返しがまいります。ですから、この修理は完璧な修理だとお互いに絶対思っていないといけない。(中略)これからも心してメンテナンスをはかっていくことが大事だと思います。」と指摘した。同様のことはパネルディスカッションのパネラー諸氏がいのように指摘していた。要するに問題はこれからの維持管理と半ば日常的な修復作業をどう進めるかである。その成否と、それに対する使命や責任はかかって、大分県、そして臼杵市つまりこの貴重な文化遺産を擁する地元にある。

今回の論議で司会者として問い掛けたかったことは、臼杵磨崖仏について「地域」は何をすべきかということにつきる。この問題意識には、私自身文化財行政に永くかかわってきた者としての反省なり自己批判の思いがこめられている。西川・賀川氏の講演でも明らかかなように、今回の大修理事業は、各分野の全国から参集した研究者たちからなる修理委

員会委員の指導助言のもと、文化庁・東京国立文化財研究所等、主として国レベルの省庁や機関の主導によつてすすめられ、それでこそはじめて事業を完遂することができたものである。取り扱う文化財がそれだけ重要なものであり、かつその修理がきわめてむづかしいものであった故のことであつたのはいうまでもない。この間、地元臼杵市と市教育委員会、県文化課等も終始その最前線にある部局として事業の遂行にあたつたが、その多くはいわば地元の事務局的な業務に終始したはずである。大分県内にあつて保存科学の専門技術者と施設を有する唯一の機関である宇佐風土記の丘歴史民俗資料館も、主体的にこの事業にかかわることはなかつた。こうした経緯をふりかえる時、これらの貴重な文化財を擁する「地域」としての大分県なり臼杵市なりが、それとしての責任と使命を十分に果たしたかという思いは残るのである。修理委員会での論議の仔細や、修理方法の研究過程と成果、あるいは具体的な修理作業の過程等について、これを地域の能力に応じて移植し消化し定着させる努力。地域として当然なすべき努力を私たちはどれだけしたのだろうか。そういう努力も研究もなされないまま、ただ中央レベルの修復を見守つたにすぎないのではないかと思いが残るのである。臼杵磨崖仏修復十五年の全過程と成果を総括し、これを地域のものとして如何に根付かせるかつ育てるか。こうした問題をめぐつて「地域」が果たすべき役割は何か。今回の論議の中で、こうした点についてとくに大胆率直な論議をいただきたかつたのだが、菊田氏、山田氏が、それぞれ当該分野についての公的機関の直接の担当者であることもあつてか、今ひとつ明確な発言をえられなかつた。

そうした中で、石澤氏の発言は、このすぐれた磨崖仏を擁する臼杵市・大分県民が深く受けとめ、とりわけ行政当局において早急に実現をはかるべきものであるう。

石澤氏の指摘で特に感銘を覚えたことは「保存・修復」のための恒久的機関の設置の提言である。氏はこれについて「日本石造文化遺産研究センター」というようなものといひ、いづれにしても、こうした施設を整備することによつて臼杵で始まつた日本の石仏の修復事業について、その学術的方法論、行政側の協力体制、専門家のネット・ワーク、管

理維持体制などを含めて、世界へ、あるいはアジアへ発信出来るだろうと指摘している。そして右の施設はアジア（諸国の専門家たち）と一緒に石造文化財を保存修復していく研修・研究・情報集積の場としての発進基地になるのではないかと指摘する。特に四十年に及ぶ臼杵磨崖仏の保存修復関係事業のデータについて、これを整理して世界の文化財関係者に公開してほしいという。「この臼杵石仏の経験は、ある意味でアジア諸国の人たちに、こうして十年、二十年保存修復をすればなんとか出来るという勇氣と希望を与えることになるでしょう。」という指摘はあらためて傾聴に値すると思う。氏はこうした拠点施設について、県立の地域博物館のスタイル、国立あるいは財団法人とさまざまな方法が考えられるとした。

臼杵磨崖仏の現地に、保存修復の拠点施設をという氏の指摘には全く同感である、私はこの施設について

- (1) 臼杵磨崖仏の半ば恒常的な保存修復をふくめた石造文化財全般の保存修復のセンターの機能
- (2) 世界・日本・おいたの磨崖仏について映像等を駆使した展示と情報の集積
- (3) 臼杵磨崖仏修復前の写真・記録等をふくめた臼杵磨崖仏そのものについての展示と情報の集積

等の機能を備えた歴史資料館のようなものを現地に設置すべきだと考える。その規模は最低でも床面積二千平方メートル以上、県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館をモデルとした施設としたい。この施設はその活動領域から考えて県立の施設、あるいは県立市立を併設したものとすべきであろう。これが実現すれば臼杵磨崖仏の保存修復のためにも画期的なものとなるばかりでなく、観光・教育等の面でも大きな拠点となるはずである。のみならずここで集積された石造文化財修復の技術は、石澤氏の指摘するとおり、まさにグローバルな位相で輸出されるものとなるはずである。擁するところの素材（文化遺産としての磨崖仏）の質の高さ、施設としての学術的、教育的、観光的意義と働きの大きさ、それらに思いを致すとき、こうした施設が今もって実現の見通しもないという状況は、行政・学界・住民をふくめて総体としての「地域―大分県」の怠慢であると思われるのではない。おりから大分県政のレベルで第二国土軸の構想と、これに

かかわって「豊予海峡」がクローズアップされている。その一角の臼杵にあって、小規模ながら世界に情報発進できる施設、その一日も早い実現をのぞみたい。

なお論議をよんだ古園石仏大日如来像の仏頭復位の問題については、菊竹氏の次の発言が心に残った。「この復位によって）往時これを造像した方々の思いが復活したんだという感想でございます。そしてそれを優れた技術で復元したことによって、始めて平安時代にこれを造った製作者の美意識というのを知ることが出来るようになったとも思いますし、それから、平安時代の人々が、あの仏に求めたものが何であったかということが、平成に生きる我々に改めて問われているのではないだろうか。」